

井上円了とヘーゲル

著者	柴田 隆行
著者別名	shibata takayuki
雑誌名	井上円了センター年報
号	24
ページ	45-63
発行年	2016-03-18
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008100/

井上円了とヘーゲル

柴田隆行

shibata takayuki

はじめに

井上円了が学問の途についたとき、彼のさまざまな意味での出自である仏教界は、「愚俗の間に行われ、頑僧の手に伝わるをもつて、弊習すこぶる多く、外見上野蠻の教法たるを免れ」ない状況にあった（井上円了『仏教活論』緒言）。そうした情況のもとで井上円了は東京大学の哲学科で西洋哲学を学び、その「最高の思想」であるヘーゲル哲学が「天台の真如縁起説や華嚴の法界縁起説に同等であると了解し、仏教は哲学に勝るとも劣らない思想を有する貴重なものであると考えた」、と竹村牧男氏は「近代日本の仏教界と井上円了」と題する講演（¹）で述べている。

井上円了は哲学の四聖として釈迦、孔子、ソクラテス、カントを挙げているが、竹村氏によれば（²）、「実際は、その哲学の内容において、ヘーゲルの方をより高く評価していたようなのです。」そのように言える根拠は、たとえば円了が「相対にただちに絶対を見、絶対は全く相対以外の何物でもないという立場に到達した」人としてヘーゲルを捉え、ヘーゲルの「相絶兩対不二」の思想、「二元同体の理」こそが究極的な立場であると円了は見たからだ、と言う。

仏教界の衰退を憂い、西洋哲学を学んだ井上円了であるが、そのいわば頂点に位置するヘーゲルの哲学に仏教哲学の原点を再発見する。井上円了とヘーゲルとの関係が仮にこのようなことであるとするとするならば——竹村氏はこれほど単純化して捉えているわけではないし、主眼はヘーゲル哲学を超える円了独自の哲学の解明にある(3)——、円了は西洋哲学から、あるいは少なくともヘーゲルから、じつのところ何も学んでいないのではないかとこの疑念が生じる。というのも、そもそも私たちが思想を学び哲学思索をするのは、まさに「無知の知」による新たな自己の発見を求めていることであり、自分の考えの保証を先人の知恵の中に得たいからではないはずだからである。筆者によれば、井上円了は、西洋哲学やヘーゲル哲学に仏教の原理を再発見しただけでなく、確かに何か新しいことを学んだ。それが何であるかを明らかにするのが本稿の主題である。

現在のようにすぐに原典を入手したり海外留学ができる時代ではなかった明治前期において井上円了がヘーゲルを学ぶ手段は非常に限られていた。そこで、本稿では井上円了がヘーゲル哲学をどのような状況下で学んだかを先に見てから、円了独自のヘーゲル理解のありようを探ることにする。

一 フェノロサ講義

井上円了がヘーゲル哲学を詳しく知ったのは、一八八三年、東京大学哲学科三年級でフェノロサの「西洋哲学——近世哲学」の講義を聴いたときであるにちがいない。この時の登録受講生は井上円了一人であった(4)。

東京大学は一八七七年に開設された。最初に文学部が設けられ、史学・哲学及政治学科と和漢文学科の二学科が置かれた(5)。東京大学で最初に哲学を担当したのはサイルというイギリス人で、彼は一八七四年一月から東京開成学校ですでに教壇に立っていた。論理学と哲学史を担当したのは外山正一で、スペンサーの哲学を中心

に教授したと言われる。一八七八年八月に来日したアメリカ人フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908) は、政治学教授として招かれたが、理財学〔経済学〕や、哲学史、論理学をも担当した。

一八七九年九月にフェノロサが書いた学務報告書には次のようにある。

文学部第二級生徒ニハ前年ト比シク講義ヲ用ヒテ哲学史ヲ講習セシメシユエグラル及ビリュイスノ著書ヲ以テ其参考書ト為ス蓋シ専ラデカートヨリ今日ニ至ル近世哲学ノ実録ニ係ルガ故ニ其生徒ノ智見ヲ開発スル鮮少ニアラスシテ尋常空理ニ驚スル如キモノト同日ニ語ル可カラス

この年度の「哲学史」を聴講したのは有賀長雄、高田早苗、坪内勇蔵(逍遙)ら九名である。高田早苗は、「有賀君は其時分の教師であったフェノロサ氏に特に愛せられていたが、其れも其筈であつて、フェノロサ氏の哲学史の講義を理解したものは、恐らく有賀君一人位であつたらうと思ふ」と記している(6)。フェノロサから哲学史を学んだ東京大学第一回卒業生の井上哲次郎は、一八八三年四月に『西洋哲学講義』第一巻を公刊、古代ギリシアの哲学を講義した。近代哲学まで及ぶ予定が井上の渡独で中断、中世哲学は有賀長雄が引き継いだ。有賀は一八八四年にボウエンの哲学史を邦訳している。

フェノロサのヘーゲル哲学についての坪内逍遙による聴講ノートがあるが、あまりに断片的で何を言っているかほとんど理解できない。柳田泉『若き坪内逍遙』(一九八四年)によると、「語学力が十分でなかったのに、突然こういうむずかしい哲学上の学説を聴かされたので、十分筆記が出来なかつたらしく、到るところに穴があり、誤字があり、欠落があり、急いだので書体が字を成さぬところなどもあり、先生〔坪内〕が如何にこの哲学史の

聴講筆記に苦汗を滴らしたかがわかると共に、フェノロサの雄弁のすさまじさも想像される」(九五頁)という。一八八〇年度と八一年度にフェノロサの「哲学史」を聴講した三宅雄二郎は、「明治哲学界の回顧(附記)」(『岩波哲学講座』一四、一九三三年)でフェノロサの授業の様子をつぎのように描く。

日本に独逸哲学を紹介したのはフェノロサであつたけれど、当人自ら未だ深く研究せず、独逸に往つて研究したいと云つて居り、後に日本美術に興味を覚え、之に没頭し、哲学を去つた。授業中に学生の参考書としたのは独人シュエーグレル哲学史の英訳であつて、別段に指定せず、学生自ら図書館で読み、講義以上に諒解したのは米人ボウエンの近世哲学であつた。ボウエンはハーヴァート大学に於けるフェノロサの師匠の由なれど、フェノロサは之を明言しなかつた。

三宅雄二郎は『哲学涓滴』(一八八九年)でつぎのようにヘーゲル哲学を論じている。

ヘーゲル思へらく、純有と純無とは俱に吾人の知る能はざる所にして、吾人は唯だ有無両間の關係を知るに過ぎず。蓋し世界は猶關係の網の如し。關係徹せば、吾人焉ぞ世界あるを知らんや。既に世界を以て關係に過ぎずと為せば、其關係なる者は果して何に由て来るとするか。他なし、思想是のみ。關係とは思想に起れる彼此異同の相の謂にして、彼此異同の相は即ち思想が自から造出せし所なり。然れども思想をして明かに思想たらしむる所以のものは、亦夫の彼此異同の相に由らざる能はざれば、關係と思想とは、結局同一體のものとならざるべからずして、思想が毫も他に依らずして關係を造出するの処より看れば、思想は絶対自由

のものに相違なきも、其の關係あるを待て始めて思想たるを得るの点より看れば、思想は關係と相待て相對のものたらざるを得ず。実に思想の關係に於ける、絶対の相對に於ける、本より同一たらざるべからざるや明白にして、已に同一なりとせば、關係の全体は即ち思想の全体なりと謂ふを得べく、又た世界は關係より成ると言ふを一転して世界は思想なりと謂ふを得べし。(二三三〜二三六頁)

ここでとくに強調されているのは關係性である。ヘーゲル哲学の原理は關係性であり、そうであるがゆえにまた自由でもある。この考えは、三宅が参照したシュヴェーグラーやフィッシャーのものというよりは三宅自身のものであり、延いてはフェノロサの考えでもある。そのことは阪谷芳郎(一八八一年)と清沢満之(一八八四年)によるフェノロサ聴講ノートで確認できる。彼らのノートの翻訳は日本ヘーゲル学会機関誌『ヘーゲル哲学研究』に掲載されている(7)。それによると、フィヒテによって発見された三断法をヘーゲルは借りているが、「關係が世界の構築体制であるという真理」は「カントから借りているに違いない」という。關係とは何か? 關係は「二つの物の総体」であるが、「二つの物のどちらのうちにも存せず、したがってまたそれは二つの物の総体のうちにも存することができない。關係は一つの物や一つの物の性質ではありえない」。要するに、「ヘーゲルでは、絶対的なものは非現象体ではなくて、まさに關係性の關係性という体系そのものである」。

実体性はそれ自体ある実体なのだろうか? それはまったく違う。従つて存在はそれ自体、諸關係の機能の内に存在する關係の特殊な存在でなければならない。

これは、『精神現象学』の有名な言葉「実体は主体でもある」を想起させる。

思惟とは諸関係の関係性である。この思惟とは個人的なものではなく普遍的なもの、絶対的なものである。

思惟が絶対的であると言っても、それは関係性であるがゆえにけっして固定的なものではない。思惟は進化発展する。そのあり方がまさに三断法である。だが、ヘーゲルの場合、思惟が存在と同一であるとされながらも、なお論理の世界に留まる。

もしわれわれがスペンサーの進化論とヘーゲル哲学とを結合することができれば、われわれは完全な哲学を持つことになるだろう。そして、われわれはこれがこれから三〇年か四〇年のうちになされるだろうと信じる。ただしヘーゲルの唯一の弱点は、彼が科学についての知識に乏しいことである。両哲学は互いに補い合う。スペンサーの学説は、ヘーゲルに機械的進化が欠落している点を埋め合わせる。スペンサーとヘーゲルはまったく異なるように見えるとはいえ、しかし実は最も密接に結びついているのである。

清沢満之がフェノロサの「哲学史」を聴講したのは一八九一、九二年度である。清沢の聴講ノートの編者によれば⑧、フェノロサのヘーゲル理解は『エンツユクロペディー』に依拠し、しかもそれは、その論理学（通称「小論理学」）のウォレスによる英訳を教科書にしているという。

清沢の記録によれば、フェノロサはヘーゲル哲学の原理を以下の九つにまとめている。

- (一) 現象は範疇によって論理的に構成されなければならないということ。
- (二) 範疇は論理的進化の内になければならないということ。
- (三) 論理的過程は三断法でなければならぬということ。
- (四) 本体的なものは主観と客観を超越していなければならないということ。
- (五) 論理的過程は絶対的価値を持つていなければならないということ。
- (六) 現象界の事物は進化のうちになければならない。
- (七) 本体界は認識しうるしまた到達しうるものでなければならないということ。
- (八) 現象的なものは本体的なものに決定的に由来する、すなわち現象的なものと本体的なものとの間の区別は超越されねばならないということ。
- (九) 進化におけるあらゆる段階は証明されねばならないということ。

これは清沢による真宗大学寮での「西洋哲学史講義」(一八九一年〜九二年)でほぼそのまま使われている(9)。
 すなわち、「第一に現象は論法に従つて、範疇により構成せられねばならぬと云ふ。」「第二、其の範疇が論法的に開発されねばならぬと。」「第三、論理的法則は三段法でなければならぬ。」「第四、本体は主観客観を超越せねばならぬ。」「第五、論理的法則は絶対的価値を持たねばならぬ。」「第六、現象界の事物は進化的でなければならぬ。」「第七、本体は可知可達的ならざるべからずと。」「第八、現象は本体より活動的に生起せねばならぬと。」「第九、開発の段次は各々証明を要すと。」「

ヘーゲル哲学についてのフェノロサの理解が正しいかどうかは大いに疑問だが、清沢による批判的検討は見当たらない。現象は範疇によって構成される、という命題はヘーゲル哲学の原理と言えるだろうか。聴講ノートには「この点は既に論理学派の始まりにおいて見られたことである。この学派はカントと同じくらい早くに始められた。」と続く。清沢自身の講義では「此の条件はカント氏以来の条件なり。カント氏は現象界を構成するに範疇により。」とある。フェノロサの言う論理学派とは誰のことを言っているのだろうか。カントが現象界を範疇で構成したことは間違いないが、それをヘーゲル哲学の第一原理と言うのは無理ではないか。現象界の事物は進化するという第六命題は、ヘーゲルというよりもスペンサーであろう。フェノロサ講義では「運動の律動についてのスペンサーの学説は、シェリングの進化と同じ言明である。何ものも静止してはられない」というコメントがついている。第八命題で、「現象は本体より生起する」と言いつつ同時に「現象と本体の区別は超越されねばならない」というのは矛盾ではないか。フェノロサによれば、世界が何に由来するかではなくどのようなように由来したかが問題である。現象的なものと本体的なものとの二つは同じ関係の違う側面」である。ここでフェノロサが、現象と本体を「同じものの違う側面」と言わずに「同じ関係の違う側面」と述べたところが重要である。というのも、阪谷が記録したように、フェノロサはヘーゲルの「絶対的なもの」をまさに「関係性の関係性」と捉えているからである。その点は、清沢も記録している。

ヘーゲルにおいては、関係の関係性こそがそれ自身絶対的である。生命は進化しながら現に存在する。生命は、自己―発出し自己―進化する体系である。【生命は】行為するものである。ゆえに、生命は、本当の事行である。

「本体界も現象界もなく、本体性と現象性がある。〔中略〕原因も結果もないのである。むしろ、原因性にして結果性がある。自我ではなくて自我性がある等々。」と言うのも、まさに実体ではなく主体、あるいは、関係ではなく関係の關係性がヘーゲル哲学の鍵であるとフェノロサが見ている証である。

フェノロサが実施した一八八〇年度の「哲学史」の試験問題が山口静一氏により紹介されている（前掲書五九頁）。そのうちヘーゲルに関する出題の一つに「關係トハ如何ナル者ナリヤ／關係ナル者ハ都テ感覺ニ由テ知ルコトヲ得ヘキ者ニ非サルコトヲ証明セヨ／關係ナル者ハ都テ如何ナル状態ヲ以テ存在スル者ナリトナスヤ／現今世上ニ流布スル所ノ智識相對ノ理ヲ論破セヨ」というものがある。ヘーゲル哲学理解において關係性は鍵概念である。關係の存在といっても、關係なるものが実在するわけではない。「現今世上ニ流布スル智識相對」とは唯物論を指すと思われるが、唯物論に対する唯心論も關係を項に還元するか關係そのものを実体化して捉える点では同様に否定されるべきものである。清沢満之が自らの西洋哲学史講義で次のように述べているのは、フェノロサから学んだヘーゲルをよく理解してなされたものと見ることができ。

一が初から一に非ず。一の上に多あるなり。多の処に一あるなり。即ち不一不異と云ふべきなり。此の考が此処にあるなり。一にして多、多にして一と云ふ、これだけは動かぬ。森羅万象と思へば万象なり。真如と思へば真如、万法とすれば万法なり。これがヘーゲル氏の哲学の勝れた処なり。（『清沢満之全集』第五卷、

三五六頁）

二 明治前期のヘーゲル理解

つぎに、フェノロサから離れて当時のヘーゲル哲学に対する理解度を探ろう。井上円了の所説はあとで言及することとし、ここでは公刊された著作の順番に従って、前掲以外の文献を見てゆく。

ヘーゲルの著作そのものを、ドイツ語原文ではなく英訳でも読んだ形跡のある者は、明治前期、少なくとも一九〇〇年までは、ヘーゲル著『歴史研究法 上巻』(渋江保訳、博文館、一八九四年 (Lectures on the philosophy of history の訳述)) 以外に見当たらない。三宅雄二郎はかなり詳しくヘーゲル論理学を語っているが、おそらく三宅自身が挙げている多くの哲学史著作をもとにしたものであろう。中島力造はヘーゲルの *Logik* を熟読しなければならぬと言いが、文中に使われている英語はヘーゲルの概念ではない。もちろん彼らがヘーゲル著作を読まなかったとは言えない。中島は『列伝体西洋哲学小史』(一八九八年)の序文で、原著を精読し独自の解釈を加えた」と書いている。ちなみに、本書のために参考にした哲学史は三〇種以上にのぼるが列記する必要がないとの理由で記録されていない。中島は一八七九年に渡米、イエール大学にてカント研究で学位を取得、一八八九年イギリスとドイツへ留学しているから、原書を読んだ可能性はある。後述する藺田宗恵¹⁰も一八九九年渡米、一九〇一年にドイツ留学しているので、その可能性は高い。

三宅雄二郎は哲学館第十二年度高等宗教学講義録「近世哲学史」(一八八九年)でヘーゲルを論じ、その原理は「哲学は均同及不同の均同なり」、「哲学は絶対的弁証的化醇を研究する学なり」、「哲学は自己容包的理性の学なり」と要約する(五頁)。最初の命題は、いわゆる「同一性と非同一性の同一」というヘーゲル初期からの命題を指すであろう。第二命題は、「絶対は相対を離れて存すべきに非ず」という両者不可分を言うだけでなく、「絶対を知らんと欲せば須らく之を相対の境に求むべく」という、第三命題の「自己容包的」関係を言う。この「自己容包

「關係を三宅は皮肉つて、「或人へイゲルの哲学を形容して蛇の自ら其尾を啣むが如しと云へり奇喩と謂ふべし」と述べている。こうした概論を述べたあと、三宅は「純有と純無」との關係という論理学の始源論から順を追って詳説しているが、同年公刊の彼の『哲学涓滴』とほとんど同一文章が使われている。

中島力造の前掲『列伝体西洋哲学小史』でのヘーゲル哲学紹介は、とくに論理学全体を詳細に論じる本格的なものである。彼はこれ以前に哲学会雑誌第四八号（一八九一年）に「ヘーゲル氏弁証法」という論文を書いている。前者で中島はヘーゲル弁証法の大意を九つ挙げて解説している。解説を割愛して論題だけ列挙するとつぎのようになる。

- 第一 ヘーゲル氏論理的哲学ノ由テ起ル所ハ何ゾレニアルヤ
- 第二 何故ニヘーゲル氏ノ哲学ヲ論理的唯心説ト名ツクタルヤ
- 第三 哲学ノ攻究スル事柄ハ何事ナルヤ
- 第四 普通的存在トハ如何ナルモノナルヤ
- 第五 ヘーゲル哲学ノ大原理ハ何ゾヤ
- 第六 概念トハ如何ナルモノナルヤ
- 第七 然ラハ論理的概念ニ由テ諸物ノ本質ヲ会得スルノ方法如何
- 第八 然ラバヘーゲル氏ノ云フ論理学ハ通常ノ論理ト異ナルヤ
- 第九 然ラハ論理学ノ発起点ハ何所ニアルヤ

興味深いのは、このあとに八つの「批評的疑問」を挙げてある点である。第一疑問は、ヘーゲル論理学の始源が無定質の純粹実在であるならば、その活動は何を起点にして始まるか、というものである。第二疑問は、ヘーゲルは経験を超越するというが、純粹実在の活動とか転化とかはみな経験によるものではないか。第三疑問は、純粹実在の変遷が「拒否ノ拒否」によるというが、拒否には論理的意義と事実的意義があり、ヘーゲルは両者を混在させているというもの。以下省略するが、ヘーゲル哲学に対する中島力造の疑問は最終的に第八疑問に集約しうる。すなわち、ヘーゲルの論理、「最抽象的概念ヨリ発シ最実形的ノ実物界ニ達スル」変遷は、われわれの経験を逆に読んだものにすぎないというものである。筆者に言わせれば、中島の疑問は『精神現象学』と『論理学』との関係についてのヘーゲルの説明で解けるはずである。

つぎに古いヘーゲル文献は、『哲学雑誌』第七卷第六九号（一八九二年）掲載の『ヘーゲル』ノ弁証法(Dialektik)ト東洋哲学」である。これは、日本ヘーゲル学会作成のヘーゲル文献目録によると菌田宗惠著とある。菌田についてはすでに言及したが、当該論文公刊時の身分は浄土真宗西本願寺文学寮教授である。菌田は本論に入る前につきのように明言する。

今ノ世ニ於テ苟モ哲学ヲ修メント欲スルモノハ其学派ノ何タルヲ論セス、其主義ノ孰レヲ問ハス、必ス先ツ「カント」ノ哲学ニ出入セサルヘカラス、「カント」ハ哲学ノ材府ナリ、今ノ世ニ当リ哲学ヲ以テ一家ヲ作スモノハ皆必ス之ニ多少ノ薰育ヲ受ケサルヲ得ス、「カント」ハ哲学史上不滅ノ巨像ナリ

菌田の論文の特徴は論題にある通りヘーゲル哲学と東洋哲学との比較研究である。ヘーゲルは仏教を「無説」

と唱えているが、それは誤解であるか「断見外道」とか「常見外道」とかとして否定されている見解である。仏教は「非有非無ノ中道説」だからである。老子の説とヘーゲル哲学は類似する所がまったくないように見えるが、ヘーゲルが「有即無々即有ナルコトヲ唱へ、其有無カ互ニ相転化スル際ニ於テ一ノカノ存在スル」と述べている点で共通するものがある。莊子、関尹子、淮南子、陰府経、孔子、其他についても、ギリシアの哲学と比べたら遙かに共通するものがある。「仏教ノ教理ニ於テ万有ノ展開ヲ論スル所ハ弁証法ト全ク其徹ヲ異ニセス」と言える。とは言え、両者が相一致するとはもちろん言えない。

何トナレハ仏教ハ森羅万象ノ展開ヲ論スルニ当リ之ヲ以テ皆吾カ愛摺ノ妄念ヨリシテ生スル者トスルモ〔中略〕「ヘーゲル」ハ如此一層内界ニ潜入スルコトヲナス、唯之ヲ以テ吾人カ思想ノ必ス然ラサルヲ得サル所ナリトナスノミ、又其本来ノ旨意ニ於ケルモ彼ハ転迷開悟ノ為メニ之ヲ説キ此ハ純然タル學術思想ヲ以テ之ヲ論ス。

弁証法が有利な思考法であることは認めるが、だからと言って、弁証法が「万世不変ノ真理」だとか仏教が「天下唯一ノ合理的宗教」だとか言うつもりはまったくない、というのは当然の結論であろう。

さて、外堀を埋める作業が長びき、本題に入る段階で予定紙数に迫ってきたので、このあとの情況は省略する。

三 井上円了のヘーゲル理解

井上円了は、一八八二年にフェノロサの二年級向け「哲学史」を聴講し、ロックまでを学び、翌八三年に三年

級向けの近世哲学講義を聴き、カントからヘーゲルおよびそれ以後を学んでいる。この年の日付がある円了の学習ノート「明治十六年秋 稿録 文三年生 井上円了」でのヘーゲル言及は三箇所しかない。一つは、スターリング著『ヘーゲルの秘密』のノートで、「『ヘーゲルの体系は思想の宇宙であり、そのなかに自然や自我がある。ただし、契機としてである。言い換えれば、この宇宙は、あらゆる特殊なものが契機として吸収されている思想の機関である。そして、これらの契機の総和が有機的全体をなす。』と彼は言う。」(原文英語)とある。もう一つは、英訳のユーバーヴェーク『哲学史』から「ヘーゲル「によれば哲学は」弁証法的に発展する絶対者の学である。言い換えれば、自己を把握する理性の学である。」(原文英語)という一節を引いただけである。最後の一つは、「中国哲学の発展」と題する英語の論文に見られるが、この論文は内容から判断するに全文記載されている。この論文は、きちんとした英語で書かれており、内容も理路整然としているうえに、ヘーゲルの方法論すなわち弁証法を自分なりに消化し使いこなしている優れた作品であるが、著者は不明である。

哲学の世界では、哲学が進展しているうちは二つの対立する見解の連続的な闘いや論争が見られ、哲学が衰退している時は完全な調和や均衡が見られる。しばらく闘ったのち、弁証法的な反対命題が統一されて総合命題が作られる。そして、この総合命題に反対するさらに別の見解が現れて、新たな闘いが生じる。こうした過程全体が、ヘーゲルの言葉で言えば三一対を形成する。このようにして、哲学は漸次発展する。この事実は中国哲学の発展にも見出せる。

井上円了によるフェノロサ聴講ノートは現存せず、その他ヘーゲルに関するノートも以上の三点以外に見当た

らないが、円了の著作にはそれなりにまとまったヘーゲル言及がある。最も詳しくヘーゲル哲学を論じているのは、当然ながら彼の哲学史講義である『哲学要領（前編）』（一八八六年）である。その第五十二節がヘーゲル氏学派にあてられる。

つぎにヘーゲル氏はシェリング氏の説の短所を補うて一層の完全を与えたるものなり。「中略」絶対の全体を理想と名付け、その体中含有するところの物心両界を開発するもの、これを理想の進化という。その進化の順序正しく三断形をなす、いわゆる三断論法これなり。この論法はカント氏に始まりフィヒテ、シェリング諸氏相伝えてヘーゲル氏に至りて大成す。

詳論は略すが、井上円了の哲学史理解はきわめて図式的である。円了によれば、思想の発達は有機体と性質を同じくし、数種の元素相合して新成分を発生し、諸成分相集まって新組織を構成する。これを「三断法ノ規則」と言う。甲↓非甲↓乙と展開し、甲は正断、非甲は反断、その統一体は合断である。そして、甲↓非甲↓乙↓丙↓非丙↓丁↓とつづく。ギリシア哲学の前後期の諸説を結合するのは近世哲学であり、これはベーコンの実験とデカルトの思想とに分かれて対立し、カントがこれを統一した。さらにフィヒテ、シェリング、ヘーゲルとつづき、さらにクーザン、コント、ハミルトン、ミル、スペンサーとつづく。甲論乙駁をさらに丙が結び、それぞれたがいに真理を争い勝敗を競い、こうして「今日ノ如キ完全ノ組織ヲ哲学ノ上ニ結フコトヲ得タリ」と言う。

『真理金針』（一八八六年）では、西洋哲学が「唯物、唯心、唯理」、「主観、客観、理想」、「経験、本然、統合」、

「空理、常識、折衷」、「唯物、唯心、二元」等々といった弁証法的發展を繰り返しているとされ、「近世哲学の全系は、けだしこの範圍の外に出でず。」と結論づけられる。こうした西洋哲学史のありように対して、「釈尊は、三千年前の上古にありてすでにその弊を察し、中道の妙理を説いていたという。すなわち、「唯物唯心を合したる中道」、「主観客観を兼ねたる中道」、「空理と常識を折衷したる中道」、「経験と本然を統合したる中道」、「可知的と不可知的と両存したる中道」がそれである。これを相対と絶対について言えば、西洋哲学の唯理、理想、統合、折衷、二元、等々は、釈尊の中道や易の太極などと同様に、唯物、唯心等々の相対の外に存する絶対ではない。

西洋にありては、シェリング氏の哲学は相対の外に絶対を立つるをもつて、ヘーゲル氏これを駁して相絶両対不離なるゆえんを証せり。今、仏教に立つるところのものはこの両対不離説にして、ヘーゲル氏の立つるところにすこしも異なることなし。すなわち仏教にては、相対の万物その体真如の一理に外ならざるゆえんを論じて、万法是真如といい、真如の一理物心を離れて存せざるゆえんを論じて、真如是万法といい、あるいはまた、真如と万物と同体不離なるゆえんを論じて、万法是真如真如是万法、色即是空空即是色という。色はすなわち物にして、空はすなわち理なり。なお物則是理、理則是物というのがごとし。

ここに引用した一文は、『仏教活論』（一八八七年）で一字一句そのまま繰り返されている。ヘーゲルといえは弁証法すなわち三断論法が想起されるが、『宗教哲学』（一八九二年）によれば、正断、反断、合断という三断論法はフィヒテのレベルを超えていない。すなわち、フィヒテの場合、第一段は同一命題あるいは均同法、第二段

は否定命題あるいは背反法、そして第三段が制限法であるが、ここでは「我の一半が非我の一半に同じ、すなわちある制限内において我は非我に同じ」というにすぎない。ヘーゲルの三断論法は、『日宗哲学序論』（一八九五年）の説明を借りれば、「実有論は正断なり、皆空論は反断なり、これに対して非有非空の合断あり」とするものである。これは仏教の「四句百非の論式」に比することができ、四句とは有と空と亦有亦空と非有非空との四断である。この「有空の中を得たる非有非空の体」を「真如」と言う。そこから「非物非心の真如一元論」に到れば、それは「天台の平等論」であり、西洋哲学で言えば「ヘーゲルの理想論に最も相近し」という。

四 小括

三宅雄二郎や清沢満之のヘーゲル理解にはフェノロサの影響が強く見られるが、井上円了にはそれがほとんど見られないことが以上で確認された。『哲学要領』や『哲学一夕話』で強調されているように、円了が求めたのは徹底した中庸の精神であった。中庸はしかし異なるモメントの折衷ではなく、矛盾を介した総合でなければならぬ。『哲学一夕話』では円山と了水という二人の弟子に自由に発言させたあと、円了は「なんじらの諍、おのちの一方の理をみて全局を知らず」と評するが、その場合でも「了水の論も一理あり、円山の説も一理あり、二者相合して始めて円了の全道を見るべし」として両者の理を認める。双方の意見を肯定的に評価し、そのうえでそこから生じる矛盾をどのように解決するかが問題である。

ヘーゲル弁証法はたんなる中道、中庸の方法ではない。ヘーゲル『論理学』初版序文ならびに『エンツュクロペディ』第七九節にあるように、論理的なもの、抽象的ないし悟性的な面と、弁証法的ないし否定的「理性的な面、そして思弁的ないし肯定的「理性的な面を持つ。中道、中庸だけが重要なのではなく、それを成り立たし

めるモメント、とくに弁証法的不いし否定的なモメントが重要である。絶対は相對の外にあるのではないとはこのことをいう。『エンツュクロペディ』第八一節の補遺一でヘーゲルは、「近代に弁証法をふたたび思い出させ、それに新たに価値を与えたのはとりわけカントである。」と述べているが、弁証法的・否定的理性がカントの立場を指すことは間違いない。藪田宗恵が学派を問わず哲学を志す者はまずカントを学ぶべきだと強調し、井上円了が西洋哲学の「最高の思想」と評価するヘーゲルを哲学の四聖に選ばずカントを選んだのも同じ考えによるものと思われる。

東洋は一国の思想ごとごとく一主義に雷同するの傾向あり。西洋はこれに反し一思想起れば必ず他の思想の起こるあり。一主義行わるれば必ず他の主義の行わるるありて、一学派の決して独立独行することなく、一主義の決して諸想を圧伏することなく、諸学諸説互いにその真偽を争い、その優劣を競うの勢いあり。(『哲学要領』)

こうした議論の積み重ねこそ西洋の学問が進歩する理由であり、またこうした議論の積み重ねが苦手であるのが東洋の学問が退歩する理由である、と円了は指摘する。仏教を活性化させるには、仏教を深く研究し、仏教精神を広く世間に広めるだけでは不十分である。仏教も広大無辺の中道においてその真理を明らかにしなければならぬ。井上円了がヘーゲルから学んだのはまさにこうした弁証法的態度であるにちがいない。

【註】

- (1) 『国際哲学研究』第四号（二〇一五年）掲載。
- (2) 竹村牧男「近代日本の仏教界と井上円了」、『国際井上円了研究』1（二〇一三年）に掲載。
- (3) 「この辺はもはや、ヘーゲルをも超えて宇宙の真相を究明しているといえるのではないのでしょうか。しかしその背景には、天台さらには華嚴の仏教思想が大いに関わっていたことを思わずにはいられません。」（前掲九七頁）
- (4) 山口静一『フェノロサ・上』三省堂、一九八二年、四七頁。
- (5) 『東京帝国大学五〇年史』上冊、一九三二年。
- (6) 高田早苗「故有賀博士の思出の記」、『外交時報』一九二七年七月一五日号。
- (7) 山口誠一・守津隆編訳「史料 フェノロサ講義『哲学史——ヘーゲル論』（阪谷芳郎筆記）」、『ヘーゲル哲学研究』第一五号、二〇〇九年。
- (8) 守津隆・山口誠一編訳「史料 フェノロサ講義『哲学史——ヘーゲル論（清澤満之筆記）』（上）」、『ヘーゲル哲学研究』第一七号、二〇一一年。経験論までの清沢の聴講ノートは、池上哲司監修『フェノロサ「哲学史」講義』二〇一三年に収録されている。これは高嶺三吉と清沢満之の講義ノートの一部を翻刻・翻訳したものである。
- (9) 『清沢満之全集』第五卷、岩波書店、二〇〇三年、三〇七～三〇九頁。
- (10) 一八八九年に蘭田は東大哲学科に入学したが、フェノロサはすでに退職していた。